

【あとがき】

父と戦争の記憶

田中淑恵

一九八九年に神保町檜画廊で、私の初めての本の装丁作品と手製豆本の個展を開催した時、オープニングの引き出物として、活版原版刷の文庫サイズの詩集を作った。それを見て、神田小川町で一緒にデザイン事務所を営んでいた父が、自分も軍隊に行った時の体験を本にしたいという。

ちょうどワープロが出始めの頃、父はガイドブックを片手に、一頁ずつ打っては感熱紙に一六〇頁分をプリントし、それを本文の版下とし、自分で挿絵も描いた。外回りの装丁は私が手がけた。タイトルは、私が仕事で『お弁当絵日記1000日』という本を作っていたので、『絵日記 兵隊996日』にしようということになった。

原本の三年間の絵日記は、軍隊にいた頃に描いたもので、水害に遭って水浸しになっていたので、これをきちんとした形で残したかったのだらう。

父は、東京大空襲で、江東区に住んでいた母と弟三人を失くしている。その日の挿絵も掲載されているが、どんなにか無念で苦しかったことだろう。日頃無口なひとだったので、この本に憶いのすべてを込めたのだと思う。有無を言わさぬ召集、犠牲になったのは、戦争反対すら口を封じられ、洗脳され言論の自由さえもなかった庶民たちである。

文中に、「民主主義は五〇年経たないと定着しないという。しかし、これを守り育て自分たちのものにするには、五〇年はおろか百年かかるもしれない」という下りがある。戦後七〇年が経とうとしているのに、昨今の世相は、戦前に逆戻りしたかの如くであり、父の心配が杞憂ではなかったように思えてならない。

晩年まで、父はこの本を毎日読んでいたの
で、死後手擦れした真っ黒な本が残された。
葬儀の日、私はその本を柩の中にそつと収
めた。天国で母と弟たちと再会し、また一緒
に読むことが出来るように。